

心の輪を広げる体験作文 一般部門 ◆佳作

「ふつう」

スーパースター（仮名）

ふつうって何だろうって考えることが子供の頃からありました。小学校の時の卒業アルバムの将来の夢は「ふつうの生活」でした。こんなにわかりやすい言葉なのに、その意味を考えるとあまりに抽象的すぎて、具体的にどうしたいのか、どうなりたいのかということとは全然思い浮かべることができませんでした。

ただ、人とは違う道歩みたいとか、何事かを成し遂げたいという野心とかがあったわけではありません。

平凡ながらもしあわせな毎日を過ごしたい、ただそれだけだったのかもしれない。

これも抽象的ですが・・・

僕が精神病患者になったのは26歳の時です。以来20年以上、精神病患者として、この社会で生きてきました。自分の人生の半分を「ふつうの人」として過ごし、半分を「精神病患者」として過ごしてきたのです。

若かった頃、精神科医の診断を下されたわけではない僕は、ふつうの人として生活していました。といっても、その頃の僕の心のなかには嵐のなかにいるような状態でした。

ふつうにしようとしてもふつうにできないふつうコンプレックスの状態でした。

他人とまともに話せない

人の役に立つことがなにもできない

若き頃の悩みというのは一歩間違えればたやすく精神のバランスを崩してしまう危ういものだとも思います。

子供の頃に抱いていた「ふつうにくらしたい」ということがいかにもむずかしいことか、みんなはそれをなんとなくクリアしているのだろうか。みんなができることを自分はできない、自分は「ふつう」じゃないんだと思い込んで孤独を深めていきました。

それからほどなく精神を病み、正式に診断が下され、精神病患者としての人生を送ることになります。

もう自分はふつうじゃない

真つ当な道を外れてしまった

これからはふつうじゃない人として生きていくしかない
そう自覚するのはとてもつらいことでした。

そんな孤独に凝り固まった自分の心境に変化が表れてきたのは、地域の障がい者作業所に通所するようになってからだと思います。通所し始めたころは、「ここにいるのは今だけで、いずれ「ふつう」の就職をするんだ」とか「僕は他の利用者とは違うんだ」とか今考えると偉そうに思っていたんだと思います。

でも、そこで出会ったふつうの人たちである職員さんとの交流をとおして、なにげない優しさに触れたりもしました。

そこには利用者さんを含めて、学生の時とは違い、年上から年下まで様々な年齢の方とまじあえる場所で、一緒に一泊旅行に行ったリレクをしたり、遊ぶだけではなく、お金をもらう作業を行う共同行動の場でした。

ふつうにするというのは共同で一体になって何かをすることができるといふことなのかもしれないと気づかされました。

僕が考えていたのは一人で行動出来て、一人でやり遂げることができることを「ふつう」と思っていたので、その考えが修正されたような気もしました。

まともな人間関係が築けなかった僕にとってはそうした「場」のファーストコンタクトは新鮮なものでした。

他の障害者の方と活動することでふつうであらねばと意識しすぎて、気が急ぐこともなくなりました。

そこにはただ淡々と日常を送っている人間がいるだけ。

人の行動というのはどれだけ興味がないと思っていたことでも、実際に関わって、動いてみることで楽しいと思えてくることもある。頭だけで考えていても、やってみないと自分がどう感じるかはわからないし、やってみることで「こころも動き出すものだ」ということにも気づきました。

現在も作業所からB型事業所に変わったおなじところに通所を続けています。

いまの職員さんにもお世話になっています。次の一步を踏みだすための力をつけさせてもらっている時間だと思ってたいせつにしているみたいです。

考えてみると僕は「健常者」「障害者」の時間を半分ずつ過ごしたのではなく、それは僕のなかでは地続きの時間であり、ふつうであるとかないとかも関係なく、僕なりの行き方だったのだと思いま

す。

結局「ふっつ」というのはあくまでも言葉にすぎず、それに縛られて回り道するのはあまりにも時間がもったいないと思います。

自分で自分を決めつけて、苦しめてしまうことから卒業していききたいです。